



転倒しそうになって地面に手をつき、手首を傷めた。そんなときは「舟状骨骨折」になっていないか、きちんと検査を受けよう。症状が軽いからといって放っておくと、複雑な手術が必要になる場合もある。早期診断と治療が欠かせないけれど、県鳴門病院整形外科の佐藤亮祐医長に症状や治療法を聞いた。



佐藤亮祐医長

舟状骨は、親指の付け根辺りにある小さな骨。真ん中がくぼんでおり、船のような形をしている。

舟状骨骨折は、手が反った状態で強い衝撃を受けたときに起こりやすい。サッカーやバスケットボール、ラグビーといったスポーツで、背中から倒れそうになって手をついた選手に多くみられる。バドミントンや体操など長期間にわたって手首

に負荷がかかり、疲労骨折するケースもある。

診断は、エックス線検査で骨折しているかどうかチェックする。

ただ、けがの直後は骨折した部分が画像に映らず、見逃されるケースもある。1〜2週間たっても手首に痛みが残るようなら、再検査をしてもらおう。確実に診断するため、CT(コンピューター断層撮影)やMRI(磁気共鳴画像装置)を使うこともある。

治療法は、ギプスで固定する保存療法と外科手術がある。折れた位置や、ずれの大きさ

捻挫と思い放置は禁物

28



によって判断する。

保存療法は、ギプスで6週間ほど固定する。舟状骨は修復しにくい骨なので、治療するまでに4〜6カ月かかる。

手術の場合は、折れた骨を特殊なネジでつなぎ合わせて固定する。30分ほどで終わる例が多く、患者の負担も少ない。早期の競技復帰を目指して手術を選択することもある。

舟状骨骨折は、早期に治療すれば後遺症の心配はない。問題になるのは、ひどい痛みがなく、腫れも少ないため、捻挫と違って治療を受けないケースだ。

痛みや腫れは自然と収まる。しかし、気付かない間にも舟状骨の状態は悪化し、いつまでも骨が繋がらない

「偽関節」になる。骨が折れた際に血管がダメージを受けていれば、栄養を運ぶ血液が骨に届かず壊死する恐れもある。

偽関節や骨の壊死を放置していると、変形性関節症に進展する。痛みだけでなく、手首に力が入らない、動かすににくいといった症状が出て、日常生活に支障を来す。治療も大掛かりになり、前腕の橈骨や大腿骨から血管ごと移植する複雑な手術が必要になる。

佐藤医長は「舟状骨骨折は、偽関節になる前の治療が大切。捻挫と紛らわしいので保護者や指導者も注意し、疑いがあれば整形外科で診てもらってほしい」と話している。(山口和也)

舟状骨骨折